

婚活 始めたら 売れ残りパパイア
に迫られたので

もと意識高い系
婚活女子♥

現ガバマン
中古おぼさん

肉便器

を前提にお付き合いしてみた

社会に出てはや数年。
人並みに稼げるようになったし
俺もそろそろ結婚を考える年頃だ。

というわけで善は急げ。
俺は婚活パーティーとやらに参加した。

だが安いところを選んでせいなのかもしれない。
指示も出されず
勝手に話して下さいという感じのおざなりな会だった。

悲しいことに俺は童貞だ。
彼女ができたこともないし当然女性への
アプローチの仕方などまったくわからない。

だがせっかく参加したのだ。
なんとか話しやすそうな女性はいないかと
俺は周りを見渡した。
そこである一人の女性が目についた。

うわっ、なんだあの人!?
ほとんどおっぱい出てるじゃないか!!

しかもかなりの爆乳だ。
思わずそのたわわな引力に引き寄せられ
声をかけそうになる。

だがすんでのところで
ある違和感に気づいた。



「あの人の回り
誰も男性参加者が近寄ってこない。
それにあの人が、なんていうか……」

胸にしか目がいつてなかつたが
全身を見てわかつた。
あの人そこそこの年増だ。
美人ではあるけど化粧でいろいろ
誤魔化しているのがわかる。

だがそんなことよりも
俺が一番驚いたのは
その顔に見覚えがあったことだ。

かなり体格がふくよかに
なつているけど間違いない。
昔近所に住んでた大学生のお姉さん
香織さんだ。

香織さんは俺の初恋の女性だ。
少年時代の俺は美人で
スタイルのたい彼女に
一目惚れしたんだ。



でもその恋は彼女のSNSを覗いて
すぐに終わりを告げた。

固定された投稿



香織@20才婚活女子大生

30歳以下年収1000万以上
家事育児を二人で頑張ってくれる
未来の旦那様募集中♡



香織@20才婚活女子大生

年収1000万に怒ってる人がいるけど
努力を知らないのかな？
私を批判する時間あるなら
自分を高めればいいのに



香織@20才婚活女子大生

私「ディナーは中華が食べたいな」
低年収男
「ちかくに玉将あるから行こっか」
年収一千万以上の男性
「〇〇とXXと△△を予約してあるけど
どこがいい？」

こういう意識の差が年収に現れるん
だろうな



香織@20才婚活女子大生

チェーン店が悪いって言ってるんじゃない
ありません！デートのために
頑張っておめかしした女の子に対して
安い店を選ぶ感性が駄目なんです！

香織さんはネットですぐに見かける
痛い女だったんだ。

いくら巨乳で美人でも
あの性格じゃ結婚相手には
選ばれないよね……

俺の年齢から逆算すると
もう彼女の賞味期限は切れている。
現実を見れなかつた
女の末路がそこにあつた。

彼女のようにならな
彼張つて相手を
俺は別の女性を
香織さんから視
だが——



「もしかして勇太君？
私のこと覚えてる？
あなたが小さい時
何度か遊んであげたでしょ？」

香織さんは俺を見つけると
猛烈な勢いで距離を詰めてきた。

いや、距離を詰めたなんてレベルじゃない。
ぴったりと密着して惜しげもなく
大事な部分を押し付けてくる。

もぎゅん

グ
グ

「うわあ……
あのおばさんまたいる」

「この前もやってたのに
懲りないわね」

「あの男性も可哀想に。
今日はやるまで
付きまとわれるわね」

まわりから聞こえてくる声で
香織さんの現状がよくわかった。
これはマジの地雷だ。
関わらない方がいいやつだ。

でも……

「ねえ勇太くん。
このあと時間ある？」

「お姉さんと
気持ちいいこと
しない？」

ぴらっ

ブルン

「ね？いいでしょ？
ほら見て♡
このおっぱいを
好きにできるのよ♡」

他の女性が言うように香織さんは
滅茶苦茶しつこかった。
しまいは胸まで露出してくる始末。
周りからの迷惑そうな視線に耐えられず
俺はしづの迷惑そうな彼女と会場を出た。

ホテルに入るなり
俺はベッドに押し倒された。

「ふふっ、まさか勇太くんと
こんな関係になるなんて
思ってもみなかったな」

「実はあの頃から
いいなって思ってたの♡」

一応はそれっぽい雰囲気を作ろうとしていたけど、二言目から矛盾している。こんな薄い言葉をはじめてかもしれない。

その辺自分でも自覚があつたみたいだ。
心通わすためのおしやべりは早々に諦め
香織さんは唇を合わせてくる。

俺にとつては初めてのキスだ。
ずつと女の人のところへ行くことを
夢見てきた。

でもなんだろう……
香織さんとするキスに
俺の心は全然高鳴っていない。

い
ちゅ
っ
っ
っ



むしろ冷静になった俺は
彼女の顔をマジマジと
観察する余裕があった。

キスの時って
こんな間抜けな顔になるのかとか
アツプで見ると厚化粧なのがよくわかったか
失礼なことを考えてしまう。



ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ

「ふふっ、お姉ちゃんもう
我慢できないわ♥」

「シャワーは……
いらないわよね？」

あまり興奮していない俺を他所に
香織さんはほとんど事を進めていく。
その強引さの裏には
どこか焦りが見て取れた。



「わあ！すごく大きい！
こんな立派なおチ○チンを持つてるなんて
素敵だわ勇太くん！」

香織さんは
慣れた手つきで俺を脱がし
また白々しい
誉め言葉を吐いた。

立派なんて言うが
現状の息子はせいせい
七分勃ちと言ったところ。

生のま○こを見せられ
流石に興奮はしているが
フルボツキするほど
気分は乗っていないかった。

スリ スリ



そんな俺の内心などお構いなしに
香織さんは俺のイチモツを
飲み込んだ。

「んあっ♡
おうきい♡」

「すごいわ勇太くん。
多分これ慣れてない女の子だったら
入り切らない大きさよ♡」

香織さんはわざとらしい猫撫で声で
俺に媚びてくる。
だが俺は香織さんのま○こに
全く逆の評価を下していた。

ズ
ズ
ズ



正直言ってちよつとユルい。
使い古して捨てる直前の
ギリギリ使えるオナホくらの締めりだ。

イケないことはないが
かなり時間がかかりそう。

平均よりサイズのでかい俺でこつなのだから
普通の男なら絶対に射精までいけないうらう。
その上——



「あーイッ♡
ふんふん♡♡♡」

香織さんは自分二人で
先にイッてしまった。

ガッガッ

ガッガッ

イッ♡

潮を吹いてるし
膣が痙攣してちよつとだけ
締まりが良くなったので
多分これは演技じゃないのだから。



「ごめんなね！
あまりに勇太くんのおチ○チンが
気持ちよくて！」

「これじゃ不完全燃焼だよな？
次は口でしてあげるから!!」

プル
プル



ハァ
ハァ

ハァ
ハァ

イル

イル

流石にこれは不味いと思ったのか
香織さんは目に見えて焦つていた。
そのまま俺の返答を待つことなく
イチモツにしゃぶりついた。

香織さんのフエラはなんとというか……
キス顔を見た時以上に幻滅するものだった。

なんだか夕ヨに襲われてる気分だ。
こんな変顔を
大して親しくもない男に見せて
恥ずかしくないのだろうか？

んっ

んっ

んっ

シッポ
シッポ

シッポ
シッポ

非モテの俺なんか言うのは
我が儘なかも知れないけど
初エツチはもつと清楚な子に
捧げたかったよ……。



俺の心が冷めていくと同時に
イチモツも硬さを失っていく。

それに気づいた香織さんは
さらにバキユームを強め
なんとか俺を射精させようとする。

んんんん

ググググ

グググググ

んんん

ゴボゴボゴボ

んんん!!

だがそれは逆効果だった。
あまりに強く吸われ過ぎて
痛いレベルだったのだ。



「もういいよ。
その……俺たちあんまり
相性よくないみたいだ」

「んんんん」

ポロッ

んんんん



「あっ……フェラは嫌いだった？
じゃあパイヌリとかどうかな？」

「あとはアナルとかも行けるわよ！
お姉さん経験豊富だから！」

わわわ

わわわ

「勇太くんが望むプレイ
なんでもさせてあげる!!!」

香織さんはしつこく食い下がってきた。
俺の顔を見ればもう女として
見られてないことがわかるはずだ。
でも彼女は現実を受け入れられないのだから。



あまりにしつこいので
もつと強めの言葉で断りを入れると
香織さんの呼吸はほとんど荒くなっていた。

「違うの……
わたし……しは……」

「だって昔は……
みんながわたしを
求めてたのに……」

ガッ
ガッ

クッ
クッ

ガッ
ガッ

それでも彼女は俺から離れず
うわ言のように何かを言っていたが
やがて限界を迎えたようで
意識を失ってしまった。

そのまま香織さんは倒れ込み
白目を剥きながら失禁した。

ピン
ピン

そこにはかつて俺が
一目惚れした清楚で美人な
香織さんの面影はどこにもなかった。

この人はもう
女として終わってるんだ。
実感を持ってそれがわかった。

シッコボボ

でもなぜだろう……俺は香織さんの体に手を伸ばしていた。

「や……やわらかい。これがおっぱいの感触なのか……」

うっ

わっ

ぢゅん

むみ
もみ

「考えてみれば香織さんが一方的に動いてたせいで俺からは何もできてないんだよな」

「せっかくの初セックスが台無しだよ……」

「そう思ったなら
なんかムカついてきたな……」

「そっちから誘ったくせに
結局射精させて
もらえなかったし……」

「せめてその責任は
とつてもらわないと。
意識なくてもオナホとしてなら
使えるよね？」

ゴブ〜

あ……

どいぢやう……

このときの俺は冷静に考えれば
最低なことを言っていた。
でも性欲を解消し損ねた俺の頭は
たぶん冷静ではなかったのだらう。

「それじゃあ……
再びお邪魔するよ
香織さん」

「ん……
やっぱりゆるいね。
気を失うでさらに
締りが悪くなってる」

「でもなんだろう……
レイプ現場みたいな光景なのに
最初より興奮するな……」

「どうやらこのシチュエーションは
俺の性癖に刺さったらしい。
イチモツは徐々に硬さを増してい
きついに完全な勃起にまで至った。」



「おおっ！
フル勃起状態だと
ちようどいい締め具合だ！」

「やったね香織さん！
なんとかこのま〇こ
使えそうだよ！」

「年増だし太ってるし
ガバマンだけど
まだギリギリ女の価値は
残ってるじゃん！」

俺は初めて感じる
セックスの快楽に
流されるままに腰を振った。
同時に香織さんへの
失礼な発言が自然と口から出てきた。



「無様だね香織さん！
昔は金持ちイケメンしか
食えない高嶺の花だったのに！」

「いまや俺なんか
こき下ろされる底辺女に
成り下がっちゃって！」

「そりゃ現実を
受け止められなくて
気絶もしちゃうよ！」

自分では気づいてなかつたけど
どうやら俺は嗜虐的な性癖があるらしい。
香織さんを罵るほどに興奮し
腰の動きが早くなっていく。



そうしてようやく俺は
初めて女性のま○こで絶頂を迎えた。

「ふう……
ようやく射精できた」

「これがセックス……
こんなに気持ち良い
ものなんだ……」

「でも……
まだ物足りないや」

背徳的な状況に酔っているせいか
賢者モードは訪れなかった。
俺はそのまま二回戦に突入した。



夕ガが外れた俺は
香織さんをモノのように扱った。

まるで特大のオナホを
使うように持ち上げ
勢いよくチ○コを打ち付ける。

俺の巨根でこんな
乱暴なことをしたら
普通の女性は一
壊れてしまうだろう。



俺はそこから
何度も香織さんを使った。

途中で意識を取り戻し
何か言っていた気がするが
無視して犯し続けた。

まて!!

休ませて

いぶっ
イグググググ

どうせ一夜限りの関係だし
又けるだけ又いとかなないと
損だしね。

ムクムク

パ

パ

パ

パ

「ふう……出した出した。もうこれ以上は出ないや」

「でも流石にちよつとやりすぎたかな……?」

計5回の射精を終えて
ようやく俺の性欲は収まった。
だが賢者モードを迎えたあとに
残ったのはこの惨状だった。

これは下手すれば訴えられるかも。
俺の背中に嫌な汗が流れる。
だが香織さんの反応は俺の
想定外のものだった。



「すっ——
すごく気持ちよかつたわ勇太君！
お姉さん勇太くんのチ○コに
メロメロにされちゃった！」

「是非とも付き合って！
なんなら
セフレでいいから！」

この人はここまで
落ちぶれてしまったのか……。
あのプライドの塊だった香織さんからの
あまりに卑屈な申し出に俺は愕然とする。

でも……俺は彼女を哀れに
思いながらも
セフレという靈感的な言葉に
心を揺さぶられていた。



翌日。
俺は仕事終わりに香織さんの
マンションを訪ねていた。

香織さんの思惑は見え透いている。
セフレとして体の関係が続けるうちに
既成事実でも作るうとしているのだから。

冷静に考えるなら
これ以上彼女に関わるべきじゃない。
でも俺は性欲に逆らえなかつた。

「いらっしやい勇太君♡
翌日に会ってくれるなんて
すごく嬉しいわ♡」

「見て、この服♡
勇太君のためにエッチなやつ
着てみたんだ♡」

「今日はいっぱい
搾り取っちゃうぞ♡」

玄関を開けるなり俺は
下品な格好の香織さんに
アラフオの女性がする
あまりに痛々ない格好だ。
この人と結婚なんて絶対
にしたくない。

でも明るい場所で見ても改めて思う。
この身体は性欲処理だけを目的にするなら
最高の肉感だ。

俺はこのムチムチの身体に
チ○コをねじ込む快樂を知ってしまった。

かつて憧れた高嶺の花を
性欲処理だけのために
モノのように扱う気持ち良さに
目覚めてしまった。

だから……
避妊にだけ気をつければ大丈夫だから。
そう自分に言い訳して
目の前の肉に手を伸ばす。

「香織さん昔と比べて
かなり太ったね。
今体重何キロ？」

「うっ……うっ……あ♡
女の子にそんなこと聞いちゃ
だめでしょ？」

「もう女の子って
歳じゃないでしょ？」

ぬいゅっ

俺は内心ドキドキしながらも
香織さんをためてみた。
昨日は許されたけど本来
こんなこと女性に言ったら
ピンタされても文句は言えない。

俺はその興奮のままに
イチモツをブチ込んだ。
相変わらず緩い。
だが俺の巨根には
程よいサイズのま○こだ。

「あっ♡イクッ
イクウウウウウ」

ダズダズ

ドヤアア

ガッガッ

「すごいわ勇太君♡
挿入しただけで
イカされちゃった♡」

昨日初めてハメたばかりなのに
もう彼女のま○こは俺のモノで
イクことを覚えていた。



香織さんはそれを俺の功績にして機嫌を取りたいようだ。でもその手には乗らない。

「ようぽど調教が上手かったんだらうね。どんな人だったの？」

「え？」

「元カレの話だよ。童貞の俺がこんな簡単に女性をイカせられるわけではないでしょ？」

「だ……だめよ♥女性に昔の男の話なんて聞いちゃ……」

「言わないならもう会わないよ？」



「む……
昔付き合ってた彼が
エッチがすごく好きで……」

「いっぱい
させてあげてるうちに
敏感になって……」

「なにその薄い情報。
言う気ないなら
もうやめるよ?」

「まっ……
待って!」



「22歳の時に金山っていうベンチャー企業の大社長に弄ばれたの！」

「結婚してくれらるって言うから彼の性癖に付き合ってた何時間も電マ当てられたりパイプ突っ込まれたりして！」

「すぐ潮吹きする淫乱ま○んこされちゃったの！」

よほど悔しい思い出なのか香織さんは鼻水を垂らして泣き出した。そんな彼女を慰めもせず俺は乱暴に腰を打ち付けた。



香織さんの惨めなヤリ捨て話しを着に俺は本日一度目の絶頂を迎えた。まだまだ性欲は収まらない。

「正直幻滅したよ。あの清楚な香織さんがこんなビッチになつてたなんてね」

「ごめんなさい……」

「セフレ以外の関係には絶対ならないから肝に銘じておいてね」

「……はい」

香織さんを罵りながらも俺は次に使いたい穴へと手を伸ばした。



「そっういえば昨日
アナルもいけるとか言ってたよね？
ここもその人に調教されたの？」

「んおおおおっ♡
そこは13人目に付き合った
金堀つて男にいい♡」

「フツツツ」

「13人って……
それだけ付き合って
結婚できなかったの？」

「そっ……
それはあ……♡」

「ズバツ」



「んオホツ——♡
おほおほおほおほおほおほおほ♡」

「ははは！何その間抜けな声！
ヤリ捨てられた上に
こんな下品な喘ぎ声まで
仕込まれてたの!？」

「本当に香織さんは
肉便器としてしか
扱われてなかったんだね！」



「うわ〜その上
お尻掘られながら
漏らしてるし」

「おほっ♡
じゅんなさいららら♡」

「アナル入れられたらっ♡
漏らすようっ♡
舐けられてるのほおおお」

「うはっー！
本当に終わってるねー！」



だがちよつと
言いすぎてしまったようだ。
香織さんは泣き出してしまった。

「やっぱり……ひっく……
嫌だよね……」

グストッ

ホロホロ

「こんな汚れた
中古のガバマンおばさんなんて
結婚してくれないよね……」

やはり本心では
俺との結婚を夢見てたみたいだ。
俺がポコポコに言ったせいで
だがあまりに俺がポコポコに言ったせいで
図太い神経の香織さんも
ポツキリ心が折れてしまったようだ。

くはぁ



だが、だからこそ香織さんは
引けなくなってしまうたようだ。

「お願い見捨てないで！
もう結婚は完璧に
諦めるから！」

ズ
ム
ッ

「ひとりきりは嫌なの！
せめて肉便器として
側に居させて!!」

「ほら、ま○こは緩いけど
これなら強く勇太君の手○こ
挟んであげられるでしょ？」

「本当にお願いします！
もう私の楽しみなんて
セックスする以外ないの！」

ガム

ガム

ガム

ガム

「何度も中絶させられて
妊娠出来ない体にな
つちやつたし！」

「もう男に抱かれること
でしか女の悦びを得るこ
とが出来ないの！」

どさくさに紛れて
かたり重い事実を告げられる。
彼女が付き合ってきた男たちは
俺なんか比つたよ。ならない程の
鬼畜クズだ。男たち程の

「つまりこのま〇こは
どれだけ中出ししても
問題ないってことだよね？」

「そっ……そうよ。
子供が産めないなんて言ったら
絶対結婚してもらえないと思っ
言わなかったけど……」

「まこ10年間くらい
生でヤリまくってるのに
全く妊娠できないの……」

「はっ
はっ
はっ」

ここまで散々ハードなプレイをしながらも
生ハメだけは我慢していた。
妊娠などさせてしまったらそれこそ
逃げられなくなるんだから当然だ。
でもずっとここにザーメンを
ぶち撒けたくて仕方なかったんだ。

気づいたら俺は
一心不乱に腰を振っていた。

イッ

ドクドク

イッ
イッ
イッ
イッ
イッ

パン
パン
パン

パン
パン

イッ

イッ
イッ
イッ

これがメスを支配するための
本当の交尾なんだ。
そう思うと罵倒より
乱暴するよりもずっと興奮する。

そのくせ妊娠することはないから
責任を取る必要もない。
香織さんはまさに男にとって都合のいい
最高の肉便器だ。

だから――

「そこまで言うのなら
肉便器として飼ってあげるよ」

「明日からよろしくね香織」

プルプル

ハァ
ハァ
ハァ

グ
グ
グ

「はっ――はいっ♡
ご主人さまああああ♡」

とりあえず婚活はお休みして
俺はしばらく
この売れ残りま〇こを
堪能することにした。

家賃は全額香織持ちだし
家事も全て香織がやってくれた。

代わりに俺がすることといえば
あらゆる穴にザーメンを
注ぐことくらいだ。



俺はまさに男の
理想の生活を手に入れたんだ。

でもそのせいで婚活への意欲は
まったく湧かなくなってしまうた。

だって嫁相手には
こんな酷いプレイできないし
何かと気を使わないといけないし
何かなくなる。

そう考えるとなんだか
面倒くさくなってしまうのだ。



そうは言っても子供は欲しいから
結婚しないわけには
いかないんだるうけど……。



ただそのときは
この都合のいい肉便器を
捨てないといけないのだ。

それがもつたいなくて
俺はぐだぐだと関係を
続けてしまっている。

俺が捨てたら香織が
何をしでかすかわからない
という怖さもあるった。

ゴク
ゴク

ゴク
ゴク

ゴク
ゴク

ゴク
ゴク

ゴク
ゴク

ゴク
ゴク

でも考えたところで
都合のいい解決など
浮かぶはずもなく
今日も俺は決断を先送りし
香織の体を貪った。



——と人知れず俺は
悩んでいたのだが……

ギョッ

「ねえ香織……
妊娠できないって
言ったよね？」

「なっ——何言ってるの？
これは太っただけよ！
歳を取るとこれくらい急激に
脂肪がつくものなの！」

最初は俺もその言い分を信じていた。
見ても通る香織は演技が下手だし。
あの時の悲痛な不妊告白は
嘘じゃないと思っていた。

「なのに……この乳首から
噴き出るものは何？」

プルプル

ピシャッ

ギューム

「こら——
これは何かの
病気で——」

「これ以上
言い逃れするなら
捨てるよ？」

「ごめんなさい!!
騙すつもりはなかつたの!!
ほんとにここ10年間
何百回と中出しされても
妊娠しなかつたの!!」

「お願いだから産ませて！
これが最後のチャンスかも
しれないの!!」

「私の全財産渡すから!!
子供と一緒に一生
あなたの奴隷になるから!!」

「だからどうか
私をママにさせてください!!」

妊娠を認めた途端
怒涛の懇願が始まった。
この必死さを見るに本当にこの妊娠は
奇跡みたいなものなんだろう。





お願い!!
赤ちゃん♡

産みたい♡

産みたい♡

ん♡♡♡♡♡

なんとなくしてやられた感じがして
ムカついたりから
とりあえずその日は返事を先延ばしにし
ポテ腹セックスを楽しんだ。

でも今から相手探すのも
面倒くさいし
もうコイツでいいのかもしれない。

おわり









固定された投稿



香織@20才婚活女子大生

30歳以下年収1000万以上
家事育児を二人で頑張ってくれる
未来の旦那様募集中♡



香織@20才婚活女子大生

年収1000万に怒ってる人がいるけど
努力を知らないのかな？
私を批判する時間あるなら
自分を高めればいいのに



香織@20才婚活女子大生

私「ディナーは中華が食べたいな」
低年収男
「ちかくに玉将あるから行こっか」
年収一千万以上の男性
「〇〇とXXと△△を予約してあるけど
どこがいい？」

こういう意識の差が年収に現れるん
だろうな



香織@20才婚活女子大生

チェーン店が悪いって言ってるんじゃない
ありません！デートのために
頑張っておめかしした女の子に対して
安い店を選ぶ感性が駄目なんです！





ぐんぐん

ぐん

ぐん





ぐんぐん

ぴん







ちゅ

ちゅ
ちゅ

ちゅ

ちゅ



「ア
ハハハ」

「ハ
ハハハ」

























♡

♡

淫



むっ

んっ

ぎゅん

むみ
もみ



あーっ

ゴゴ〜

よーいっ!
りんご



ん

ん

ん
ん
ん

ん









あ

うあ

あお

ぱ

ぱ

ぱ

ぱ

ぱ

ぱ



ドクドク

シシシ

ドクドク

バババ

バババ

バババ

バババ

ドクドク













お尻っ















ズバズバ

グググ



















泣いてる

泣いてる



グ
ル
グ
ル

ハ
ア
ハ
ア

ハ
ア
ハ
ア

グ
ル
グ
ル











クワッ
クワッ

ポッポッ
ポッポッ

クワッ
クワッ

クワッ
クワッ

クワッ
クワッ

クワッ
クワッ









お願い!!
赤ちゃん♡

産みたい♡

産みたい♡

んんん♡
んんん♡

んんん♡
んんん♡

んんん♡
んんん♡

んんん♡
んんん♡

んんん♡
んんん♡

んんん♡
んんん♡

んんん♡
んんん♡